

明治17(1884)年に現在の文京区弥生町向ヶ岡貝塚から採集された1個の壺が、それまで見つかった石器時代の(今で言う縄文時代)の土器とも古墳から出土する土器とも違う種類の土器であることが明らかになり、さらに両時代の中間の時代であることが判明したため、その土器を「弥生式土器」と命名し、その時代を「弥生式土器時代」と呼ぶようになりました。これが弥生時代の名前の由来です。その後、登呂遺跡が発掘され、集落跡と高床倉庫跡以外にも水田跡が見つかり、「弥生時代は水田稲作による農耕の時代」という考え方が広まります。

今日、縄文土器による年代配列において重要な遺跡として広く知られている加曽利貝塚では、大正時代に発掘する地点をアルファベットごとに分けて調査をしていましたが、その際B地点とE地点から新しい形の土器が発見されました。加曽利貝塚からは縄文時代後期前半の土器(堀之内式土器)も出土しており、B地点では上層から加曽利B式が出土しその下層から堀之内式が、E地点では上層から堀之内式が出土しその下層から加曽利E式が出土しており、日本で初めて土器の変遷が層位的に確認されています。

突帯文土器とは、九州から東海地方東部までの広い範囲に成立した土器の名称で、口縁部や肩部に突帯(刻み目の入ったものが多い)と呼ばれる粘土の帯を貼り付けた特徴的な甕のことです。壺・鉢・高坏(たかつき)など日常に使う土器を伴うことが多いので、これらのセットを突帯文土器様式と呼んでいます。

1950年に縄文晩期の土器の破片が発見された福岡県の板付遺跡で、1978年に画期的な発見がありました。弥生初期の水田跡から、この突帯文土器様式の土器しか出土しない単純層が現れ、そこから足跡の残った水田跡・炭化した米粒・畦道・柵を打ち込んだ水門・排水溝などが見つかったのです。

突帯文土器様式の土器を縄文土器とされていたそれまでの時代区分に従えば、水稻農耕は縄文晩期から始まったということになり、また、水稻農耕の始まりを以て弥生時代の始まりだとすると、弥生時代の始まりが早くなって縄文晩期に食い込むことになります。そこで北部九州では水稻農耕の始まる紀元前5世紀初めごろから約200年間を「弥生早期」という概念が生み出されました。

近畿地方にも突帯文土器が多数出土し、土器片に靱圧痕も見つっていますが、水田跡が見つからないところから、水稻農耕はいわゆる弥生前期前半(紀元前3世紀初めごろ)から始まったものとされています。つまり近畿地方や東海地方東部は、突帯文土器が使われていたにもかかわらず「弥生早期」がなかったことになります。そうすると、水稻農耕は北部九州で始まってから200年余の歳月をかけて近畿地方に伝わったことになります。

近年刊行された縄文時代を記述する書籍にも、衣服を身に着けずに大木に石斧を振るう縄文人の想像風景が掲載されていて、縄文社会は「食うや食わずのその日暮らし」で余剰などはないという一般的通念が未だに残っています。しかし、鳥浜貝塚から出土した漆の櫛や下宅部遺跡の漆塗り杓子を見ると、縄文時代に漆製作の技術が完成の域に達していることが分かります。縄文と弥生の骨格器を比較しても、鉄器のない縄文時代でも弥生時代の細工と引けをとらない精巧さが見て取れます。

つい最近まで、縄文文化は狩猟採集の文化であり、そのような文化は「遊動生活を送り、人口は希薄で、階級や階層の分化は認められず、分業も性差によるものを除くと、ほとんど認められない」とされてきました。しかし、前述した出土遺物だけでなく、遺構による住居跡や集落の痕跡、貯蔵穴などの研究から、縄文社会は「食うや食わずのその日暮らし」の社会どころか、相当程度の計画性をもった貯蔵経済社会であったことが明らかになってきています。縄文文化は定住・貯蔵の文化であり、人口は予想以上に多く、階級はともかく階層が存在し、個々人や集落間の分業もかえって発達していて、交易も日用品に関しては、弥生時代よりも盛んであった可能性があるようです。

縄文人が住居のそばに墓地を作ったのとは対照的に、弥生人は集落の近くの共同墓地に遺体を埋葬しました。北部九州の東側では、甕棺という大型の埋葬専用の土器に遺体を入れて葬る甕棺墓が発達しました。一方西側では、大型の平たい石を数個の支石で支え、その下に土壇墓や箱式石棺墓、甕棺墓などの埋葬施設がある支石墓

が見られます。支石墓は朝鮮半島にも広く分布している墓制です。

中国地方では、板石を四角く組み合わせた箱式石棺墓が主流をなしました。

木棺を埋めた周りに四角く溝をめぐらし、掘り上げた土で塚を築いた方形周溝墓は弥生前期に出現し、中期には中部・関東地方にまで広がりました。

このように、弥生時代の墓は、地方により様々な形態をとることに特徴があります。

佐原真氏は1975年に弥生時代を「日本で食糧生産を主とする生活が始まった時代」と提唱し、現在も広く受け入れられています。弥生文化の領域については「青森県下で水田跡の存在が確認されたことによって、本州が北端に至るまで弥生文化の領域に属することは、いまや疑えない」としています。

しかし、単に縄文文化と時代を画するだけであれば灌漑式水田稲作の始まりを指標にすればよいですが、弥生文化を同時代の東アジア各地の農耕文化や後続する古墳文化とも画するとすれば、それだけでは不十分であり、生業構造の中における水田稲作の位置づけや社会的・祭祀的側面の特徴を明確にしてこそ識別が可能であるとの主張があります。

「稲作が入ったからといって即弥生とはいえない。システム論的にみても、他の要素を巻き込みながらどう変化し、安定し、固定化していったか、ということを見なければならぬ」との見解がある一方で、「弥生時代を縄文時代と画するのは、灌漑稲作の開始というもっとも基底的な要素をもって定め、社会や祭祀の質的な変化はそれに続いて地域ごとに状況を変えながら徐々に進行した」として生業の変化を重視し、各地域の特性や事情を幅広く受け入れるべきとする見解もあります。